

私の学位申請論文「前期ハイデガーにおける生の哲学」（以下「本稿」と表記）の概要を、以下に簡単にお示しいたします。

本稿の問題設定とその背景

マルティン・ハイデガー（1889-1976）が「存在（Sein）への問い」を彼の哲学の中心的主題としていたことはよく知られており、ハイデガー自身が回顧するところによれば、ギムナジウム在学中の1907年の夏に、彼は存在への問いに目覚めたのだといいます。そうであれば、ハイデガーの思索は、その端緒からしてすでに「存在への問い」へと向かっていたのではないかと思われそうですが、ところが、1919年から1923年にかけてのいわゆる初期フライブルク期の講義録に目を向けてみるならば、そこでは意外なことに、存在の問題ではなく、むしろ私たち自身の「事実的な生（faktisches Leben）」が中心的な問題として取り上げられていることが露わとなります。しかし時代を下って、1927年に公刊された彼の主著『存在と時間』を見てみると、その冒頭で「存在への問い」が鮮烈に提示されてこれが中心テーマとされているのに対して、全編を通して生の問題はほとんど論じられておらず、初期フライブルク期に生概念が占めていた位置には、新たに「現存在（Dasein）」なる概念が置かれるようになっていきます。

ではハイデガーは、生という語が含んでいる豊かな概念性を捨て去って、存在の思索へと舵を切ったのでしょうか。初期フライブルク期のハイデガーが展開した「生の哲学」は、『存在と時間』に至るまでの間にいったいどのように処理されたのでしょうか。本稿全体を貫く問題意識は、この点にあります。

第一章 前期ハイデガーにおける主要概念の変遷——生から現存在への道を辿る——

上のような問題を論じるにあたって、まず本稿第一章においては、初期フライブルク期から『存在と時間』に至るハイデガーの諸テクストを年代順に検討し、生概念がどの時点で現存在概念へとその座を譲ることになったのかを、生と現存在の各概念の内実にも注意を払いつつ検討し、本稿全体の論述のための準備を整えました。その検討の結果、初期フライブルク期には概して生が現存在より多用されていたものの、1923年夏学期の『存在論』講義の時期を境にして両概念の使用頻度は逆転し、その後は現存在概念の使用が中心となっていったことが明らかになりました。さらにこの章では、現存在概念や、これと密接な関わりをもつ「世界（Welt）」概念の用法が詳しく分析される中で、当の1923年の『存在論』講義の頃までのハイデガーにおいては、「存在（Sein）」と「存在者（Seiendes）」との間の「存在論的差異（ontologische Differenz）」が必ずしも明確になっておらず、また同時に、現存在のWorinとしての「世界（Welt）」と、内世界的存在者を表すような、現存在のWobeiとしての「世界（»Welt«）」との区別についても不徹底なままであったことが指摘されました。

第二章 生と現存在の根本規定としての慮り

第二章では、第一章において、初期フライブルク期の生概念と、『存在と時間』の時期の現存在概念に共通する根本規定として提示された「慮り (Sorge)」（「慮ること (Sorgen)」）の概念を詳細に分析し、初期フライブルク期の *Sorgen* と、『存在と時間』の *Sorge* との根本的な連続性を主張しました。具体的には、初期の *Sorgen* 概念が有していた、自己、他者、モノとの実践的な関わりという契機が、『存在と時間』においては、それぞれ、他者との関わりは *Fürsorgen*、モノとの関わりは *Besorgen* として術語化されていることが確認されました。ただし、自己との関わりという契機については、『存在と時間』においては、*Sorge* の第三契機「内世界的に出会われる存在者のもとでの存在 (Sein-bei innerweltlich belegendem Seienden)」に対応する *Fürsorgen* や *Besorgen* といった概念と並列的に *Selbstsorge* といった術語によって表現することがあえて回避され、むしろこれは *Sorge* の第一契機「おのれに先立って存在すること (sich-vorwegsein)」において表現されている、ということが示されました。つまり、自己、他者、モノとの関わりという *Sorgen* の三契機は、たしかに *Sorge* 概念にまで基本的に継承されていたわけですが、ただし、自己との関わりのみは *Sorge* において他の二つの契機と異なった概念的位置に置かれるように変化しており、この一点においては両概念の相違が見出されたということです。なお、ここで示された両概念の相違点は、本稿の第五章や第六章の議論を進めていく上でも重要な役割を担うこととなります。

第三章 生から現存在への転換はなぜ生じたのか？——生概念の二重性と現存在——

以上のように第一章と第二章において、本稿の議論の中心となる諸概念の内実が、そのテキスト上の変遷を辿りつつ詳細に分析されることにより、本稿の論述のための基本的な準備が整えられたことを受け、第三章では、ハイデガーにおける生から現存在への転換という事態がいったいなぜ生じたのかを正面から論じました。その結果、まず、現存在概念を使用することのメリットとして、次の二点が指摘されました。一つは、現存在概念は、人間という存在者をもつ、存在の「開示性」を適切に表現することができるという点であり、他の一つは、現存在概念が、人間存在の本質は、それが「何であるか (Wassein)」によってではなく、むしろそれが「いかにあるか (Wiessein)」によって規定されるべきだ、というポイントを表現するのに適しているという点です。他方で、生概念の使用が取り止められた背景については、次の二つの考え方が提示されました。一つは、人間学に特有の人間理解、すなわち、動物や植物の存在である ζωή に定位した上で、人間とは ζωή の中でも「言葉をもつ (λόγον ἔχον)」存在者のことである、と考える人間理解への批判によって、ζωή の含意をもつ「生 (Leben)」の使用を取り止めたというものです (テーゼ A)。他の一つは、ヴィルヘルム・ディルタイの「生の哲学」——初期ハイデガーは「人間の実存」を含意する βίος としての生概念をそこから継承しているのですが——に対して、ハイデガーが『存在と時間』の時期にかけて次第に批判的になっていったため、生概念の使用を中止した、というものです (テーゼ B)。なお、生概念の使用が取り止められた理由に関するこの二つの説明は、後続する第四章と第五章において、他の哲学者との思想的な交流に着目することによって、継続して検討されることとなります。

第四章 ハイデガーは哲学的人間学に接近したか？

——『形而上学の根本諸概念』におけるハイデガーの議論をめぐって——

第四章においては、上述のテーゼ A について、伝統的な人間理解の発想を踏襲している（とハイデガーにみなされている）マックス・シェーラーの哲学的人間学に対するハイデガーの関わりを論じました。具体的にはこの章では、1927 年の『存在と時間』刊行から間もない 1929/30 年冬学期の『形而上学の根本諸概念』講義においてハイデガーが哲学的人間学に急速に接近している、と主張する先行研究が、批判的に検討されました。その結果明らかになったのは、以下のようなことです。シェーラーの人間学においては、人間は、「生衝迫（Lebensdrang）」という根本原理を含む生の諸段階を、他の生命体と共通に有している存在でありながら、他方で、「精神（Geist）」の原理によって他の生命体から本質的に区別される存在である、と考えられています。しかし、『形而上学の根本諸概念』のハイデガーにおいては、たしかに、動物と人間の比較考察など哲学的人間学の方法論が一部採用されている点が認められはするものの、「精神」をもった「生」として人間を構想するという、上のようなシェーラーの基本的な発想——これは伝統的な人間理解の延長上にあるものなのですが——は拒絶されているのです。こうしてテーゼ A の主張は、1920 年代末の、シェーラーに対するハイデガーの関わりにまで視野を広げたときにも、いまだ有効であることが確かめられました。

第五章 ハイデガーによる「生の哲学」の批判的継承

——『存在と時間』における二つのディルタイ論を中心に——

第五章では、上述のテーゼ B に関連して、『存在と時間』の第 43 節と第 77 節におけるディルタイ論が検討されました。具体的には、ハイデガーがディルタイに対して批判的言及をする際の基本テーゼである、ディルタイは生の存在への問いに至っていない、という批判が具体的に何を意味しているのかが問題となりました。これを考える上での前提として、存在と存在者との間の「存在論的差異」が自覚されて「存在という理念」が登場する——このことによって生の存在を問うということも可能になります——ためには、事物的存在者と歴史的な存在者（としての生）との間の差異が強調されていなければならない、というハイデガーの基本的な考えがあります。ところが、第 77 節のハイデガーによれば、本来ディルタイは、生の「自己省察」を通して歴史的な存在者としての生を内側から問うていたはずであるにもかかわらず、審美的・形態的な見方によってこれを眺めやるような傾向が彼の議論には忍び込んでしまっているのであり、さらに第 43 節のハイデガーの考えによれば、「実在性」の問題は、本来は現存在ないし生の存在の方から考えられるべきであるにもかかわらず、ディルタイは、あくまで事物性に関する議論にとどまってしまっているのだといえます。つまり、第 77 節と第 43 節の議論では、ときにディルタイは、彼の本来的な傾向に反して、歴史的な存在者としての生について問うべきところで、事物的存在者に定位して議論を展開してしまっていることがある、という点が示されているわけです。それゆえハイデガーによれば、ディルタイは生の存在への問いへと至ることができない、ということになります。こうして第五章では、テーゼ B で問題とされていた、ハイデガーのディルタイ批判の内実が確認されました。

第六章 生の哲学から死の実存論的分析へ——『存在と時間』第二篇第二章の検討——

本稿の最終章となる第六章では、『存在と時間』における死の実存論的分析が詳細に検討されました。本章の第一節と第二節の議論では、ハイデガーが積極的に問題としている「死へ臨む存在 (Sein zum Tode)」、つまり「死亡すること (Sterben)」の諸契機が具体的に示され、それを踏まえた上で第三節では、人間の「終わること (Enden)」に関する、Sterbenとは異なった捉え方である「落命すること (Ableben)」という概念が提示されました。この Sterben と Ableben との相違は、Sterben が、自己に固有で、けっして現実化されえないような「可能性 (Möglichkeit)」としての死を問題にしているのに対して、Ableben は、自己に固有でなく、日常において日々経験しているような、「現実性 (Wirklichkeit)」に定位して考えられたところの死を問題にしている、という点です。そして、ハイデガーの考えでは、後者の Ableben は、人間学において問題とされるような ζωή に対応しているだけでなく、ディルタイや初期フライブルク期のハイデガー自身が問題としていたような βίος にも対応しており、しかも、Ableben が Sterben に基づいているとハイデガーは主張しているため、死の分析でもって彼は、ディルタイや初期フライブルク期の自身による「生の哲学」の枠内では捉えきれなかった人間存在の在り方を問題にしていると言えます。本章では最終的に、以上のことを、第二章で分析された Sorge 概念と結び付けて考えることにより、ディルタイや初期フライブルク期のハイデガーの「生の哲学」は、『存在と時間』の議論においてはとくに現存在の日常性の分析へと継承されている、という点も示唆されました。

まとめ

以上のような第一章から第六章までの議論によって、本稿では、初期フライブルク期のハイデガーによって展開された「生の哲学」が、その内実において『存在と時間』にまで継承されているという点が、基本的なポイントとして示されました。具体的には、本稿の第三章において提出され、第四章と第五章において他の哲学者との思想的交流をも視野に入れて検討された、生概念の使用が中止された理由に関する二つのテーゼは、いずれも初期ハイデガーが用いていた βίος の内実にとっていわば外的な事柄を問題にしているため、生概念が『存在と時間』にまで流れ込んでいる可能性が確保されることとなります。しかも、第二章での Sorge 概念の詳細な検討を通して、生概念の内実が現存在概念へと——第六章の議論を踏まえるならば、とりわけ現存在の日常性の分析へと——継承されていることが確かめられたのでした。そして、第五章で検討された、初期ハイデガーが生概念をそこから摂取したところのディルタイの「生の哲学」との関わりをも視野に入れるならば、『存在と時間』のハイデガーは、その本来的な傾向を受け継ぎ、それを徹底化した末に「存在への問い」に到達しているわけですから、文字通り初期フライブルク期の「生の哲学」は『存在と時間』にまで継承されているということになるでしょう。

誤植等の訂正

- ・ 97 頁 下から 7 行目 「哲学人間学」→「哲学的人間学」
- ・ 182 頁 注 69 下から 1 行目 「2003 年」→「2003 年）」
- ・ 182 頁 注 69 下から 1 行目 文末に「高田珠樹訳 (作品社、2013 年)」を追加